

男女共同参画の視点で地域活動を考える

座談会

未曾有の災害といわれる3.11東日本大震災から、女性の力を活かすことが地域力アップに欠かせないと学びました。丸亀市で地域活動に関わる女性たちが集まり、防災における男女共同参画の視点の大切さについて語り合いました。

宗片さんの講演を聴いて

岡本：講演会のアンケートでは「地域のために活躍している女性から自分を活かす術を学びたい。地域づくりに女性もリーダーシップをとって力を発揮しなければならない」といった感想が、老若男女を問わず多く寄せられています。みなさんは、どんなことを感じましたか。

山田：生の女性の声を聴けてよかったです。洗濯やお風呂なども当たり前でない中で、被災していても日常の細々とした仕事が女性の肩にかかるのでは大変です。弱い立場の人や女性への暴力事件は阪神淡路大震災でも多発したそうです。自分が同じ状況になったらどうやって対処できるでしょう。自助・共助・公助について考えなければ…。

福岡：地域を超えた人々の助け合いに感銘を受けました。医療関係者などは専門領域で最善を尽くしますが、自分は何ができるでしょう。とにかく、ちっちゃいところから始めようと思います。

常井：もっと男性に聴いてほしかった。女性が思っていることを声に出すことが大切。宗片さんが東日本大震災前から、被災した時のことについて調査し提言していたことに感心しました。

上戸：多方面で女性ならではの実践をしていて頼もしく思いました。女性の視点を活かすためにも、自治会や連合自治会で女性が連携して課題を提案していきたい。

清水：育児や介護で忙しい女性は、会合への参加も意見を出すことも難しいと思います。埋もれた意見を拾い上げられる女性リーダーが増えると心強いと思いました。一番印象に残っているのは、ある避難所で被災された女性たちが一日中調理室で皆の食事作りをしている一方、男性は手持ちぶさたで過ごしながらかつたら食べにくるという話でした。最近の家庭は男性が家事や育児に関わるケースも増えてはいますが、日常の家庭の風景を映しているように思えました。

溝淵：女性が自治会長の避難所では、授乳や着替え等プライバシーに配慮した運営がされていました。自治会長は男性が多いので、女性の声が届く仕組みが必要です。避難所で子どもが泣くので気兼ねして、やむなく被災した自宅にもどった家庭もあったそうですが、普段からみんなで、子どもを温かく見守り育てること、子育てに限らず「男女共同参画のまちづくり」が大切だと思います。



清水さん

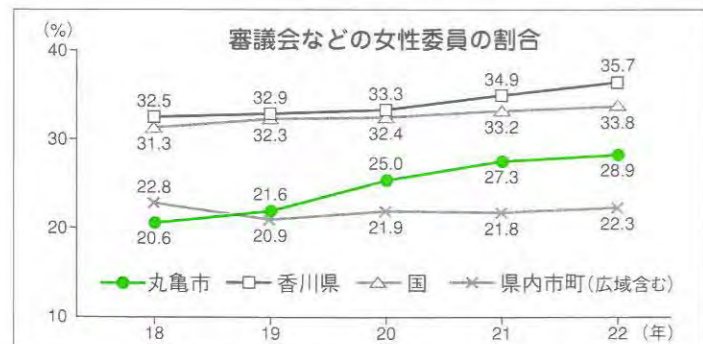


山田さん



上戸さん

※丸亀市の自治会長842人のうち
女性は94人
女性比率は11.2% (平成23年4月1日データ)
【参考】全国平均3.8% 県平均6.4%
(平成21年データ)



【資料】香川県市町 香川県県民活動・男女共同参画調べ
国内閣府「国の審議会等における女性委員の参画状況調べ」



【備考】東日本大震災の影響により、平成23年の岩手県、宮城県及び福島県の数値は、前年数値(平成22年4月1日現在)より集計している。(消防庁HPより)

【座談会参加者】

- 清水 志保さん (母子愛育班連絡協議会副会長)
- 上戸 壽美子さん (土器地区さつき自治会長)
- 常井 美代子さん (人権擁護委員)
- 福岡 由紀子さん (婦人団体連絡協議会会長)
- 山田 理恵子さん (生活環境部地域振興課副課長)

【編集委員】 岡本 恵子 (司会) 溝淵 由美子 山本 晃美



地域でできること

岡本：非常時には普段は潜在している問題が顕在化しやすい。「子育て・家事・介護は女性の仕事」という性別役割分担意識から、当たり前のように避難所で女性は一日中調理室にこもり三度三度の何百人分もの食事の世話をする。自身も被災者である女性の大きな負担になるが、声をあげることもできない。そこで、普段から男女の別なくみんなで地域のために何ができるか考え、女性だけでなく子どもやお年寄り、障がい・病気を持つ方のための小さな一歩を踏み出すことが大事。どんな取り組みができるのでしょうか。

清水：現在コミュニティ等で保管されている備蓄品に、赤ちゃんのミルクやおむつ等を加えてもらえるよう、母子愛育班の視点から要望していければと思います。

上戸：自治会で防災の勉強と話し合いを始めたい。年輩の方が多く若い人が少ない地域なので、働き手が家にいない時間帯での防災対策も切実な課題です。

山本：うちの団地では避難訓練参加者が減ってきています。高齢世帯が増えているので、近所同士で誰と一緒に避難するか考えておく必要があります。

常井：私の地域は、各家庭の様子は女性同士でだいたい把握できている人が多勢いると思います。そんな個人の力を活かして、子育ても終わり、退職して時間もある自分たちの世代の女性が、まず問題意識をもち、行動につなげていかなければならないと思います。



常井さん

福岡：婦人会のリーダー研修でバスタオルを使って手縫いの防災頭巾を作っています。地域に広め家庭に置いてもらいたい。汗ふきにもなるし、ワイワイ言いながらみんなで一緒に作ると楽しい。缶入りビスケットは美味しいし備蓄に向いているとか、家庭の備蓄品や持ち出しグッズのアイデアも共有したいですね。



福岡さん

山田：みなさんが、地域の要となって主体的に声をあげてくださることが本当にありがたいし心強いです。私の住んでいる地域は、お互いに顔を合わせるのは総会くらいで、近所でも名前がわからない方も多いので、非常時のことを考えると不安です。

福岡：普段のコミュニティの会などには女性が多く参加してくれます。地域の細かいことを男性はあまり知らないですね。

清水：うちの地域では数年前に子ども数が増え、祭りに太鼓台を復活させたことで年齢を超えたつながりが生まれ、家、顔、名前が分かるようになりました。防犯パトロールなど地域の見守りも、顔見知りの大人がしていると子どもも安心して挨拶しています。

岡本：「丸亀市男女共同参画プラン」には、生き生きと安心して暮らせるまちづくりのために、政策決定の場に女性を！と明記されていますが、残念ながら、現在防災会議に女性委員がいません。みんなが元気で幸せに暮らせるように、これからも智恵を出し合い仲良く協働していきましょう。

消防団における女性団員の活動

全国的に消防団員の数が減少する中、女性の団員数は少しずつ増加しており、その活躍が期待されています。丸亀市消防団に19名の女性が入団したのは平成20年10月1日。現在、当初からの16名を含め22名の団員が本市で活動しています。地域からの要請を受け、高齢者の自宅訪問での予防活動やAED使用の講師、母子愛育班の皆さんへの応急手当法の普及などの活動をしています。団本部長の三原さんは「仕事を持ちながら消防団の訓練や活動は大変だが、様々な知識を習得でき自分にとってプラスになっている。地域に貢献できるのでやりがいがある。」と語ってくれました。三原さんは、会社の上司が消防団員なので活動への理解があるそうですが、家族の応援や周囲の環境が必要だとのこと。地域防災への女性たちのチャレンジが増えることで、地域力アップが期待されます。



丸亀市消防団本部長 三原由加里さん
丸亀市消防本部総務課担当 岡田和亮さん
(H24.2.1/ゆめの部屋にて)